

スクールカウンセラー印象記 －行動化する生徒との関わりを中心に－

西村 則 昭

キーワード：スクールカウンセラー，思春期の行動化する生徒，魂の事柄

1

L市立L中学は、不登校の数も多く、いわゆる反社会的な生徒、行動化する生徒²⁾の問題も多くかかえた大規模校であった。まだスクールカウンセラーが旧文部省の試験的事業の段階にあった頃、ぼくはL中学に週一回勤務することになった。L中学はぼくのスクールカウンセラー初体験の勤務地だった。

今のようにスクールカウンセラーの仕事のスタンダードが、それほど明確化されていない模索期のことであった。「スクールカウンセラー初心者のための研修会」などといったものもなく、個人心理療法の経験と知識だけで、学校現場に飛び込むぼくのような臨床心理士も少なくなかった（そのことに対する強い批判もあったが）。そんな模索期だったからこそ、いろいろと面白い経験をさせてもらうことができたのではないかと思う（スクールカウンセラーが意味のある仕事として世の中に認知されるためには、スタンダードの確立は必要なことであることはいうまでもないが）。ぼくのように、枠からはみ出しがちで、体制に馴染まず、コモン・センスに順応しにくい人間にとって、模索期にこの仕事ができただけは、よきめぐりあわせであったと思っている（大学院を出たけれど就職先のなかったぼくとしては、経済的にもずいぶん恩恵を被った）。それはともかく、われわれスクールカウンセラーとしての臨床心理士は、謙虚にしかもプライドをもって、自らの専門性を学校現場で生かすことに努めてきたのであった。

L中学でぼくは、生徒指導部主任のM先生の下ではたらくことになった。M先生は、やんちゃな生徒に「睨み」の効く、百戦錬磨のベテラン教師だった（ほんとうに猛禽類のように眼光の鋭い先生だった）。しかし最近の生徒たちとの関わりの中で、いろいろと思うところもあったようで、あるときM先生はぼくにこんなことをいった、

「今の時代、ぼくが中学生だったら、彼らと同じように、やんちゃやっていたかもしれません」

それでぼくは、

「今の時代、ぼくが中学生だったら、不登校になっていたかもしれません」といって、ふたりで笑い合ったことがあった。

M先生の配慮のおかげで、ぼくは別室登校の生徒たちや行動化する生徒たちと、しだいに仲良くなっていくことができた。

神経症的な不登校生徒のことは、これまでたびたび書いてきた（西村，2000，2004a，2004b，2005）ので、この研究ノートでは、L中学の行動化する生徒との関わりに焦点を絞って書いてみようと思う。彼らは、茶髪（ときには赤や紫の髪）やピアスは定番で、校則違反の派手な恰好で

目立っていることが多かった。彼らの問題は、喫煙、薬物使用、対人暴力、器物破損、エスケープ、窃盗、家出などである。ぼくがL中学で彼らと関わることによって、彼らに対してできた心理学的援助というものは、実際のところ、まことに微々たるものであったといわざるをえない。ぼくは彼らと、神経症的な生徒とのように、面接室で継続的にじっくりと関わっていくことはできなかった。彼らとの関わりは、彼らの気儘に任せた偶発的で、断続的なものであった。教師を納得させるような、問題の現実的解決という点では、ほとんど何もしていないに等しかった。それでも、ぼくは彼らとの関わりを通していろいろと考えさせられることがあったし、彼らのほうでも、彼らの心のどこかに、あんな人間も世の中にはいるのだと、カウンセラーのぼくのことを少しでも記憶してくれていたら、それでいいのかとも思う。

われわれの体験したことで、印象的な出来事は心にいつまでも留まり、昨日のこのように思い返されるが、そうでない出来事はどんどん消え去っていく。ぼくは記憶力がよくないほうで、人の名前などときおり失念して失礼に及んでしまうことがあるが、憶えていることはほんとうによく憶えている（われながら感心することもある）。永く心に留まる事柄こそが、魂の事柄なのだと思う。この研究ノートでは、数年前、四年間勤務したL中学でのぼくの実験の中から、印象的な場面のいくつかを述べて、思うところをあれこれと語ってみたい。

2

L中学は小高い丘の上にあった。L中学に勤務して何ヶ月かした頃のこと。下校の坂道で、ぼくは早足なので、ゆっくり歩いていた紫苑（しおん）さんたち数人の女の子のグループに追いついてしまった。紫苑さんは、カウンセラーという存在に逸早く興味を示してくれた三年生の、すらりと背の高い子だった。控えめな茶髪をショートボブにしていた。それまで紫苑さんとぼくは、学校の中庭や廊下で話をすることがあった。

「やあ」と挨拶すると、ひとりの子（A子さんとしておく）は、「何なの、こいつ！」という怪訝な一瞥をぼくに与えてから、表情を消して、あえて視線を合わさず宙に漂わせ、硬い人形の顔になって、「はやく行って」といった（思春期の子のこのような拒否の顔に、ぼくはときたま出会ってきた）。しかし別の子（B子さんとしておく）が友好的に、「どこ住んでるの?」「何歳?」とか訊いてくれて、ぼくは彼女たちの世界から消去されることを免れた。しばらくいっしょに歩いていくことになった。

いっしょに歩きながら、「えんこう（援交）、えんこう」と、小声で囁すようにいう子がいた。馴れ馴れしく声を掛けてきた胡乱な男性（ぼく）と、こんなふう歩いていくことを、「援助交際」とらえている様子であった。

紫苑さんとA子さんともうひとは、お揃いの色違いの豹柄の袋を肩から下げていた。ぼくが、「そういうアニマル柄、流行ってんの?」と訊くと、Aさんは眉をしかめて、「アニマルって何!」と吐き捨てるようにいった。紫苑さんが「これは豹柄」と説明してくれた。

それから紫苑さんが、「先生、カラオケ行こ」というと、間髪いれずにそれに呼応してBさんが、「あれがカラオケ」と、道端の赤いホストを指差した。

Bさんは手首に豹柄のサポーターを巻いており、そこには安全ピンが何個も止めてあった。ぼくが、「手首切っていないかなあ?」と訊くと、「手首は切っていない。腕切ってる」。見ると、彼女の腕には、自傷の跡だろう細い筋がたくさんついていた。

紫苑さんが「あたしこれからラブホテルに行くの」といって、「心配？」と訊いてきた（女の子同士でラブホテルに行くというのも変な話であるが）。「そりゃ心配」とぼくが素直にいうと、彼女は意味ありげに「ふふふ」と笑うだけだった。

坂の下に来て、ぼくは駅の方に向かうため彼女たちと別れることになった。ぼくが手を振ると、彼女たちは笑顔で手を振り返してくれた。A子さんも大きく手を振っていて、ちょっと意外な感じで、うれしく思った。

この日以来、ぼくのいった「アニマル」が、ぼくの渾名になった。このアニマルという呼び名は、彼女たちが呼ぶと、プロレス選手ではなく、とぼけた顔のぬいぐるみの動物が連想されて、悪くないかと、ぼくは思った。この名によってぼくは、彼女たちの世界に登録され、彼女たちの心が日々生成する物語の一脇役になることができたといえる（ぼくはカウンセラーとして、クライアントの人生の物語のある時期の味のある脇役を務められたらと願っている）。

その日の坂道でぼくは、彼女たちによって、怪訝な眼差しと、友好的な眼差しという相反するものを、ほぼ同時に浴びせられた。彼女たちによって、相反するものがぼくの内部に、力強く叩きこまれるような感じを受けた。そうしてぼくは彼女たちにおもちゃにされていたようだ。しかしそのことは、彼女たちの繊細微妙、複雑深遠な気持ちを、そのままの形で（相反する気持ちは相反する気持ちのままに）受信し、肯定的に鏡映する装置（カウンセラーという装置）として、一応、ぼくのことを、彼女たちに認められる契機となったのではないかと思う。

3

九月の午後、炎天下の校庭で、生徒たちは体育祭の練習をしていた。教師の趣味なのか、懐かしの歌謡曲が大音量で鳴り響き、生徒たちはそれに合わせて、集団ダンスのようなことをしていた。ぼくはゆっくり歩きながら、その練習を見学させてもらっていた。そのうちになにか遠くから、音のない世界をながめているような哀しい気分になってきた。

ふと見ると、日陰で腰をおろしている生徒たちが何人か、あちらこちらにいた。どうも体調不良で見学しているのではなさそうだった。そんな中に、紫苑さんがいたので、ぼくはそちらに行った。

「こんにちは」と、ぼくがあいさつすると、彼女は「あたし、××(精神病者に対する差別用語)なんだって」といった。

おそらく××というのは、みんなが晩夏の強い日差しに焼かれて、汗だくになって練習しているのに、こんなふうにならぬ彼女たちが日陰で涼んでいるということ、心ない教師にとがめられていわれた言葉なのだろう。

そのときぼくも中学の頃、教師に××といわれたことを思い出した。ぼくは中学一年の秋までバスケット部に所属していたが、連日の練習がイヤでよくさぼっていた。物理的にも心理的にも自由が奪われるのがイヤでたまらなかった。夏休みの練習は、自宅にまで同学年の部員が呼びに来るようになったので、ぼくは部活に行くふりをして、ひとり自転車で、海や山に行っていた。二学期になってぼくは顧問の教師に呼ばれた。同学年の部員によってぼくは顧問のところに連行されていった。職員室でソファに座って新聞をひろげていた顧問は、その部員に吐き捨てるように、「こんな××、もう放っておけ!」とあってから、ぼくの方を蔑みの眼で睨みつけ、「おい、西村、おまえは××やもんのう」といった。情けないことにぼくは「はい」と返事した。こうしてよう

やく退部の運びとなった。その部員はそれから校舎の裏にぼくを連れて行って、ぼくに軽く平手打ちをした。退部するときはそうするのが決まりになっていたから。××という言葉は、心を凍結させていたぼくにはそれほど応えなかったが、この同学年の生徒によるビンタ(申し訳程度のものだったが)には、悔しさがこみあげてきて、いたたまれなくなった.....

紫苑さんの傍らには、ひとりの男子(C君としておく)がいて、ぼくの方を見ないで、「誰、これ?」と、例の硬質の人形の顔でいった。紫苑さんが「アニマル。カウンセラーだよ」と紹介してくれた。C君はしきりに針を石にこすりつけて、それを磨いていた。彼は紫苑さんの方を見て、「これで、開けてやろうか」といった。ぼくはピアスの穴のことだとわかった。C君の片方の耳朶を見ると、そこには塞がりかけたピアスの穴がふたつ並んでいた。

そのときぼくは、学校内で催されていた「夏休みの自由研究展」の中にあっただ、スズメバチの研究のことを思い出した。その展示はその日の午前中に見せてもらっていた。そのスズメバチの研究は、大きな巣の写真もあって、なかなか内容のあるものだった。

そのスズメバチの研究から、ぼくは自分の中学生の頃のことを思い出した。その頃、なぜかぼくは、スズメバチを見つけると、それを捕まえ、細心の注意をして、毒針を爪にはさんで抜きとって、そいつを怖くなくしてしまっ、「ペット」にしてもあそぶということを、ときどきおこなっていた。スズメバチがお尻から毒針を突き出す仕方は、一方向のピストン運動ではなく、あっちこっち方向がまばらで、獐猛さが感じられた。よくそんな危ないことをしていたものだと、今になって思うが、その頃のぼくは、そうすることで密かに自分の勇気を試していたような気もする。その頃、友達に聞いた話で、その友達の友達が、樹に止まっているスズメバチに対して、「よっ、お疲れさん!」(当時のテレビコマーシャルで、そうやって肩を叩くのがあった)とやって、平手で叩いて押し潰したとのこと。それを聞いて、ぼくの密かな自負が砕かれたように思った。それをするには恐怖を感じてしまったから。

C君と話していて、ぼくの中学の頃のスズメバチ体験がよみがえってきて、彼のピアスのための針は、ぼくの記憶のなかのスズメバチの毒針と、結びついた。C君は、教師から見たら、みんながやっていることをやろうとしない「楽しただけ」の問題児だろう。しかし、彼は針を磨き、それで自分の耳に穴を開けるときの痛みを思いながら、自分が決して教師がするようなダメな人間ではなく、勇気のある人間であることを(ぼくがスズメバチで体験したように)感じようとしていたのではなかったかと、ぼくは思った。

その場を体育祭の準備委員の男子が通りかかって、ぼくに「先生、ぼくの相談にのって。恋の相談」といった。「後でね」とぼく。C君は彼を眼で追って、「あいつ、シンナー中毒でフラフラしている」といってから、別の男子を指差し、「あいつはアル中」。すると紫苑さんが、「あたしはカクテルが好き」といった。そこに先ほどの準備委員が戻ってきて、「おまえら見学しているんだったら、静かにしてろ!」といった。その言い方は決して嫌味な感じではなかった。

準備委員はいわば体制側の人間であったが、いわば反体制側の彼らに対して、飄々として友好的な感じで接していた。今はたまたま体制側で忙しく立ち働いているが、反体制側の彼らの気持ちもわからないではないという感じだった。こんなふうには体制側と反体制側とを自由に行き来できる精神(境界を生きる精神)は、スクールカウンセラーにも求められるものである。

C君は「この学校面白くない」と呟いてから、ぼくに向かって「面白くして」。そして「鬼塚先生みたいな来てくれないかなあ」と嘆息した。

鬼塚先生とは、当時テレビで人気のあった学園ドラマの主人公だった。ハチャメチャで、しか

も人情味ある言動で、学校の秩序を掻き回し、生徒たちに慕われた若い男性教師である。ぼくは教師とは違う視点をもったカウンセラーということで、彼に期待されたのかもしれない。しかしぼくにはとても鬼塚先生のような器の大きさはなかった。かつて、「よっ、お疲れさん」とスズメバチを平手で押し潰した友達の友達に対して、ぼくが感じたような及びがたさを、C君のいう鬼塚先生に感じざるをえなかった。

ところで、ピアスに関してぼくは、思春期のイニシエーションの観点で考察したことがある（西村, 2004b, 2005）。イニシエーションとは、神話的な世界（ユングのいう「元型的な領域」）に触れ、「死と再生」を心的に体験し、ある決定的な心の変容を遂げる過程のことである。現代の日本では、それはもはや制度としては存在しない。それは各人が何らかの仕方でおこなう必要がある。一度ではなく、違った形で何度も。現代日本の思春期の子どもにとって、ピアスは、そうしたイニシエーションの機会のひとつとなりうるように思われる。ピアスには「悪」のニュアンスがあり、「無垢」な子どもの世界を越えた領域を暗示する。またピアスのための穴を開けることには痛みを伴う。その痛みに耐えた勇気ある者だけが、その領域に参入できるのである。こうしたイニシエーションの意味合いは、自分の勇気を試した、ぼくのスズメバチ体験にもあったのではないかと考えられる。

4

L中学に勤務するようになって半年ほどして、ぼくはL市教育委員会の主催で、L市の小中学校の教師を対象にした講演会を頼まれた。ぼくにとって講演会の講師ははじめての体験だった。ぼくは自分自身の経験や臨床経験を踏まえて、児童期や思春期の心理について（ピアスにおけるイニシエーションの意味なども）、その講演会では話をさせてもらった。その中にぼくの恩師の河合隼雄の「暖かい壁」の考え方も含めて述べた。

河合はいう、「思春期の生徒に対する場合、彼らの心の奥底からつき上がってくる衝動に対して、大人が防壁となって立ちはだかつてやる心構えをもつことが必要である。そのような壁にぶつかってこそ、破壊的なエネルギーが建設的なものに変容するのである。これは、子どもたちがもたらず破壊性に対して、社会や既存の秩序を守るというよりも先に、子どもたち自身の安全を守る壁、という意味をもっている」（1992, 190頁）。そうした「壁」となる大人は、「子どもたちの内面の嵐について十分知っており、それを感じとる鋭い感受性と暖かい感情をそなえていなくてはならない」（同書, 230頁）。そうした意味で、それは「暖かい壁」といわれるのである。

この河合の発言は、彼の若い頃の高校教師の経験（河合はその頃のことを「人生最良の日々」といっていた）から来ているだけではなく、心理療法家として、忍耐強くかかえていたクライアントが、少しずつ着実に変化していった経験からも来ているように思われる。深い心理臨床の経験に裏打ちされた、学校問題に関する河合の発言は、現場の教師には説得的に届くものである。

講演会が終わってしばらくしてから、その世話役であったある小学校の校長先生に、こんな話を聞かせてもらった。小学校で子どもを指導するとき、感情的に行き過ぎてしまわないように、「暖かい壁だよ！」が教師たちの間で、標語のようにになっていると。

行動化し規則に反する生徒は、教師の体現する「暖かい壁」に何度もぶつかることになる。彼らは教師との格闘によって、精神的・情緒的に成長していく。また彼らは「かまってくれる」教師のことが「好き」になり、彼らの愛情飢餓は、いつしか満たされていく。教師の苦勞の甲斐

があって、卒業後、彼らが真つ当な社会生活を送り、お世話になった教師のもとを訪問し、近況を報告することも少なくない。M先生からもそうした話を聞かせてもらった。それは教師にとって、教師冥利に尽きるというものであろう。

しかしながら、教師の親身の指導に対して、「わけわからん」という生徒の声を聞くことがよくある。このようにいう生徒は、単に力で押さえつけられるだけの非人間的な状況に置かれている自分を見出しているのである。

ここでぼくはフロイトのいう「超自我」のことを考える。超自我は幼少期の親の内在化されたもので、心の中で自我を見守り、「～してはいけない」と歯止めをかける存在のことである。それは通常「良心」といわれるものに相当する。しかし行動化する生徒の超自我は、彼らの生得的なものや生育環境の影響があるのか、過酷で非情なものとして構成されている場合が少なくない。それは、彼らの自我の存在価値を否定するかと思うと、快樂原則のままに享樂を目指せと促す。そうした超自我が教師に投影されると、彼らにとって、教師の人間性は掻き消すように見えなくなる。教師の指導は、彼らの内界で歪められて、非人間的な非情なものとなって、彼らの前に冷酷に立ち塞がる。

こうして彼らは現実生活の場面において、もはや人間のレベルを超えた次元、神話的・元型的な次元と遭遇することになる。彼らの教師に対する猛反発は、自らに対して破局をもたらすような「わけわからん」力との神話的・元型的な闘争の様相を呈する（そうした事態は、おたく系のひとならば、マンガやゲームの想像の世界の中で、自分からは適当な距離を置いて、暢気に親しんでいるものであるといえる）。教師は「指導が入らない」と嘆くことになるが、それは教師が人間的な次元に留まっているからである。少しでも気を許したらとんでもない事態を招いてしまいそうな不安から、過剰に反応してしまう教師もあるかもしれない。それは非人間的な事態を漠然と予感するからである。もちろん生徒の超自我が人間的なものに変容してくれることが望ましい。しかしそれにはまず彼らの超自我の非人間性への理解が必要なのではないか。

河合の「暖かい壁」の考え方は、単に人間的なものとして気楽に受け取られて実践されても、この混迷した難しい時代においては、あまり効力を発揮しないであろう。ヒューマニズムは万全ではないことを知るべきである。非人間的・元型的な事態に接して、われわれの心は硬くなり余裕を失ってしまいがちであるが、そうならないように精神力を保ち、現象そのものから目を逸らすことなく、その中にしっかりと我が身を置き、しかも人間性とか個性を否定されることなく、かえって人間的・個性的であり続けること、そうしたこととして、「暖かい壁」という言葉は、教師やカウンセラーによって、受け取られ実践されなければならないと思われる。難しいことであるが。

5

宙太（そらた）君は、中学にはいってまもなく、無断欠席、エスケープ、対教師暴力など、問題行動が目立つようになった。ぼくがL中学に勤務した最初の年に、宙太君は入学してきた。ぼくは勤務してまもなく、M先生から宙太君のことを聞いた。ぼくが最初に宙太君に会ったのは、二学期がはじまって間もない頃だった。午前の授業中、ぼくが階段を上って、踊り場を曲がったとき、階段の上に座っている少年がいた。小柄ながら、子どもっぽい甘さの削ぎ落とされた顔をしていた。彼の耳には銀色のピアスが光っていた。キラキラした雰囲気の子だった。ぼくが「こ

んにちは」と挨拶すると、彼は「ケッ！」と怪鳥のような声を出して、走り去っていった。

その日の昼休み、カウンセリング室に、ちょっと様子見という感じで、紫苑さんとその友達三名が来てくれていた。ひとりが「ここ相談に来ているひといるの？」と訊いてきたので、ぼくは「まだあまり来ていないよ」と正直に答え、「どうしたらここ来やすいかな？」と尋ねた。別の子が「信頼できない」といった。するとまた別の子が、「バーン」と手を拳銃にしてぼくを撃って、「信頼されようと思ったら、死なないといけないよ」といった。が、そのときぼくには撃たれて死ぬ、ひょうきんな真似はちょっとできなかった（中庭では撃たれて死んだことがあったが）。その子の手の爪には、金色の派手なマニキュアが塗られていた。

昼休みが終わって五限目、面接は入っていなかったのので、ぼくは保健室に行った。保健室には授業に出たくない生徒や、出られない生徒（その違いは明瞭なようで、明瞭でない場合もある）がよく来る。そのときもそうした生徒がひとり、白いカーテンの向こうのベッドに横になっていた。養護の先生がその子に向かって、「カウンセラーの先生来てくれたから、何か話したら」というと、「ヤダ！」と我儘娘のような声。カーテンの隙間から出した顔を見ると、さっきカウンセリング室に来てくれていた女子のひとり。「あっ、きみだったの」とぼくがいうと、彼女は少しはにかんだ顔をして、引っこんでしまった。

そのときガラガラと戸が開いて、宙太君が来た。来るなり、彼は制服の上着を脱ぎ捨て、診察台の上にとっと寝転んだ。彼の上着の釦の裏側には、キティちゃんやウルトラマンなどのマスコットが吊り下げてあった。そしてぼくの姿を認めると、胡散臭そうに眉を顰めて、ぼくの方は見ないで、「誰、あれ？」といった。

養護の先生が「カウンセラーの西村先生よ」というと、彼はぼくの方を向いて、「誰も相談なんか行かんだろ」と、ぼくが生徒の相談を受ける人間であることをすでに知っている様子。「給料いくら貰っている？」と、彼は高飛車に訊いてきた。それには答えなくて、「ぼくには相談しにくいかなあ。信頼できないっていわれたからなあ」と呟くようにいうと、カーテンの向こうで、くすくす笑う声。「あたりまえ！メガネザルのできそこないみたいなのに、だれが相談するか！」（ぼくは昔ふうの丸い眼鏡をかけていた）と、宙太君は横柄な言い方をしてから、「どう。この学校へ来てても傷つくだけじゃないか」といった。

「傷つく」という言葉を彼の口から聞くのは、そのとき意外でもあり、印象的で、ぼくは彼自身の心の傷に思いをめぐらせることになった。そしてぼくはしみじみとした調子で、「きみもいろいろと苦労してきたんだろうね」といった。すると宙太君は「うん」と、さっきの横柄さとは打って変わった素直な返事。

そのとき生徒指導部のN先生（体育会系、三十台）が来た。N先生は宙太君に向き合い、威圧感のある深い低音で、諄々とお小言を述べはじめた……

ぼくは宙太君とこんなふうに保健室や、中庭などで話をする機会が、それから何度かあった。彼はあいかわらず奇抜な恰好で、仲のよい先輩の話をしたり、隣町の中学生を恫喝した自慢話をしたり、ぼくのことを睥睨して楽しんでた。

三学期の中頃のある日、授業中ぼくが保健室に行くと宙太君がいて、「おう、やっぱり来たか」といった。ぼくは宙太君とストーブを挟んで向き合って椅子に座った。寒い時期でぼくはストーブに手を翳さないではいられなかった。宙太君はとても上機嫌で、「××ちゃん（彼が兄貴として慕う三年生）の卒業式には、特攻服来て出る」とか、「おまえ（ぼくのこと）みたいなのはキレると怖い」などと饒舌だった。

ぼくが彼の耳のオレンジ色のリングのピアスに興味を示すと、彼は「おおこれか。これはおれが作った。目玉潰して作った。おれは空飛べる。空飛んで、エイリアン捕まえて、そいつ切り刻んで、目玉割り抜いた」。自らの攻撃性をこんなふう想像力で表現するのは悪くないとぼくは思った。小柄で敏捷そうな宙太君の空飛ぶ姿を空想すると、鉄腕アトムが連想されたので、ぼくは「空飛ぶなんて、鉄腕アトムみたいだね」といった。すると彼は、「おお、おれは鉄腕アトムとも戦ったことがある」と、腕を振り回した。そのそばにはN先生もいた。いつもは小言の多いN先生もそのときは床に座り込んで、得々と語る宙太君の子どもっぽい空想を全身で受け止めている様子だった.....

6

スクールカウンセリングでは、一回だけの相談も多く、それだけにぼくは、出会いのひとつひとつを大切にしたいと思っていた。それでぼくは、カウンセリング室の壁に、「一期一会」とマジックで書いた紙をはっていた。ある日の朝、出勤したとき、二年の涼花（りょうか）さんが、複雑な表情をして、ぼくのところにぱたぱたと駆け寄ってきていった、

「あの『一期一会』、たいへんなことになっているよ！」。

涼花さんは、教室が「怖く」て、空き教室に登校（別室登校）しており、ぼくがカウンセラーとして継続的に関わっていた子だった。おかつぱ頭で、大きな眼をしていた。以前、涼花さんとの面接のとき、彼女が壁の「一期一会」のことを、「あれ何？」と訊ねてきたのに答えて、ぼくは得意げに説明したことがあった。そのとき彼女は「ふうん」と納得していた様子だった。

ぼくは涼花さんと、カウンセリング室に行ってみた。「一期一会」の紙は、机の引き出しのなかにしまわれていた。取り出して見てみると、「一期一会」が鉛筆で「一日一発」と訂正されており、「オナニーはきもちいい！」と書いてあり、その傍らに、男性の直立した一物の絵が描かれていた。その一物は噴水のように液体を噴きだしていた。涼花さんがそれを発見したとのこと。その日、ぼくの出勤前、彼女の担任教師が彼女と話をするために、カウンセリング室を使用したときのことであった。

カウンセリング室はぼくが出勤する直前にM先生がドアの鍵を開けて、窓を開け、新鮮な空気を入れ、また鍵をしていた。その後、涼花さんの担任がそこを利用するまでの少しの間、窓は開いたままになっていた。カウンセリング室は二階にあり、中庭に面していた。その窓は渡り廊下のすぐそばにあった。おそらくやんちゃな男子のひとりが、渡り廊下の手すりを乗り越え、危ない目をして、窓から忍びこんで、そうした悪戯をしたのだと推測された（その男子をD君とする）。

このD君の悪戯は、ぼくの「生真面目」で「高尚」なカウンセラー精神を、「卑猥」な事柄によって、笑い飛ばすものであった。それはぼくとしては、むしろおもしろく感じられた。この悪戯に関してぼくが思うのは、トリックスターのことである。トリックスターとは、神話や昔話に登場する悪戯者で、英雄になることもあれば、ただの破壊者に留まることもある存在である。それは、硬化した秩序を掻き乱し、建設的にも破壊的にもはたらく元型のことである。それは、シェイクスピアの悲劇の王の荘厳な雰囲気をやわらげる道化師であり、サーカスで空中ブランコの緊迫した空気を打ち破るピエロである。それはまた、タロットカードの「愚者」の意味する、すでに定まった運命のコースを狂わせる力のことである。それは、祝祭の場に不可欠な存在、祝祭の場を開き出す存在である。先に述べたC君憧れの鬼塚先生は、まさにトリックスターのイメージであ

るといえる。

それにしてもD君は、相当のトリックスターだと思った。行動化する生徒は、「面白いこと」を学校に期待し、学校が遊園地にでもなればよいと思っている。彼らは、学校を祝祭（コントロールされた体育祭などではなく、ほんとうの意味での祝祭）の場にしてくれるトリックスターを希求しているのである。まさかそれが叶うとは思わないでも、D君は、突然学校の中に出現した、カウンセリング室という不思議な部屋や、教師とは違うカウンセラーという風変わりな人物に、トリックスターとして、なにか期待するところがあったにちがいない（その期待にぼくはそれほど応えることはできなかったのだが）。だからわざわざ危険な目をして、カウンセリング室に忍びこみ、彼なりの挨拶をしていったのだろう。

行動化する男子の心身の底には、破壊的なエネルギーが、どろどろと渦巻き、たぎっている。それは彼らの愛する改造バイクやエレキギターの爆音のようである。そうした爆音は、彼らの煮えたぎる欲動の表現として、まさに彼らの身の内から噴出するのである。彼らの破壊衝動は、性衝動とわかちがたくむすびついている。性衝動は、彼らを自慰や性急な性交渉に駆り立てるだけでなく、彼らの自我を混乱させ、彼らが「真面目」であることを妨害する。「真面目」であるとは、「性」に対する関心を抑え、禁欲的に体制に順応することであるから。そして性衝動は、彼らを動かし、「真面目」な雰囲気をも攪乱し、秩序を破壊したがる。またそれは強烈な笑いをもたらすものともなる。少年マンガにおいて少年の射精は、同性愛と同様、ギャグとして描かれることが多い。このように彼らの性衝動はトリックスター性をもつ。あの「一日一発」からはD君をはじめ、男子たちの哄笑が聞こえてくるようであった（あるとき大学の講義でこのD君の話をしたところ、やはり男子の低い笑い声がどろどろと聞こえてきた）。

7

秋も深まった頃。放課後、中庭から、カウンセリング室の窓に向かって、ちょうど神社でお祈りをするときのように、パンパンと手を叩いて、「アニマル！」と声をかけてくる女子がいた。ぼくが（神社の神様のように？）窓から顔を出すと、「今から行っていい？」と彼女は訊いてきた。ぼくが「いいよ」というと、彼女はやってきた。何度かこんなふうに拍手を打って（こんなことするのは彼女だけだった）、三年生の麻利（まり）さんは相談に来てくれた。彼女ひとりのときも、友達一、二人伴ってのこともあった。

麻利さんは、エレガントな大人の女性のように、巧みな念入りの化粧をいつもしていた（素顔はほとんど隠されていた）。制服はきちんと着ており、髪は黒く、前髪は綺麗に切り揃えられていて（自分で切り揃えているとのこと）、よくいる派手な女子とも、「真面目」な子とも違っており、不思議な雰囲気の子だった。話し方は理路整然としており、彼女の知的な高さが窺われた。

麻利さんは彼氏のことで悩んでいた。彼女は彼のことをあっさり「不良」といった。彼は同学年で、反社会的な行動のため、しばらく少年鑑別所に留置されていたが、もうすぐ出所し、復学することになっていた。麻利さんは彼とまた続けて交際していくのがいいのか、自分の気持ちがわからなくなっている様子だった。「最近はそのこと、考えたくなくて、本ばかり読んでいる」と、彼女はいった。本とは、マンガやホラー小説であった。マンガというのは、通常の人気マンガではなく、周りの子はあまり知らないような「神秘的なやつ」とのこと。話を聞くと、異常な精神世界を抜群の画力で描いた、いわゆるカルト的な作品のようであった。怪奇な闇の空想世界は、

その頃の麻利さんの心に叶い、彼女の心の慰めになっていたようだ。また麻利さんは詩を書いていた。彼女の作品群の一端を教えてくれたが、彼女の詩のモチーフは、「好きなひとのこと」、日常の恋のこともあれば、遠い彼方の生命のない惑星の荒涼とした、しかも安らぎに充ちた風景のこともあった。

彼との交際は、中学二年になって間もなくはじまった。その頃麻利さんは「死にたい気分」が強く、自傷癖もあった。そんな頃、彼とは「なんとなく付き合うようになった」。夜、彼女の部屋に彼が来てくれ、いっしょに過ごすことが多かった。しだいに麻利さんは彼と自分は「とても似ている」と感じられるようになり、彼が自分の「居場所」になっていった。日常の現実を突出してしまう感性をもって、おそらく孤独を痛感していたであろう麻利さんは、彼と波長がぴったり合ったということか。しかし彼はいつも化粧をしていて、麻利さんにさえ素顔を見せてくれなかったとのこと。最近になってこの点を考えると、自分が信用されていなかった気がする、彼女は述べた。

また麻利さんは、「中間試験では九〇点とか取るけど、教室に入ってないので、通知表には2をつけられている」と、当然のこのようにいった。そして「私には将来の夢がある」といって、傍らの友達にすぐさま「いっちゃダメだよ」と釘を刺した。こんなふうにならぬ子同士で秘密をかかえようとするのは、思春期の女の子らしく、彼女の健全な前向きに生きる力を感じさせた（結局、彼女の夢は何かのか、ぼくに知らされることはなかった）。「大学に行きたい。でも、こんな成績では××（公立の進学校）に行くのは難しいから、××（遠方）の私立を考えている。××には親戚がいるので、そこから通える」と、麻利さんは前向きな気持ちを述べた。

間もなく麻利さんの彼氏が復学してきた。彼は、カーニバルのダンサーのような派手な装いで、髪はピンクで尖らせていた。生徒指導の先生方と笑顔で話をしている彼の姿をぼくは見た。

放課後、また麻利さんの拍手の音。窓から首を出したぼくに、「昨日別れた。聞きたい？」といった。「うん、聞きたい」とぼくがいうと、彼女はすぐに登って来た。「受験があるから、もう遊べないといったら、彼は怒ってしまった」。「彼怒って大丈夫かな？」と訊くと、「うん、ちょっと心配だったけど、今日見たら、ナンパしていた。なんだこいつはって思った」。「きちんといえたんだね」とぼくがしんみりいうと、「はい」と明るい返事。

しばらくして、麻利さんの母親がぜひぼくと話がしたいと、カウンセリング室に来られた。「娘がカウンセラーに話を聞いてもらって、すっきりしたと喜んでいたので、私も話を聞いてほしくなったのです」と、彼女の母親はいった。

その母親の話では、麻利さんは二年生のとき、中絶手術をしたとのこと。手術後彼女は不安定になって、家出をしたこともあったが、そのときN先生が全身全霊彼女のために尽くしてくれた。麻利さんもN先生には次第に心を開いていった。しかしN先生が近々結婚することを知って、麻利さんはまた荒れだした。「裏切られた！」と彼女はいつまでかいたとのこと。それからはN先生には殊更に反抗的な態度を取り続け、N先生とは一切口を利かなくなった。女子トイレの壁に、「N死ね！」と赤マジックで書いた犯人は、麻利さんだと推測されていた。

養護教諭も含めて何人かの教師が、彼女の心身の傷つきに心を痛め、彼女のために心を砕いてくれた。やさしく暖かい心のケアもしてくれたに違いない。麻利さんは落ち着きを取り戻し、毎日登校して、これまでのようにエスケープすることもなくなった（ぼくは廊下で、友達といそいそと、教材をかかえ教室移動する麻利さんの姿を見かけたことがあった。相変わらずの濃い化粧以外は、まったく「真面目」な生徒のひとりだった）。

麻利さんは家で、墮した子のお位牌のようなものを自分で作って、仏壇に置いて、毎日拝んでいるとのこと。その話を聞いて、ああ、そうだったのか、とぼくは納得した。彼女が仏壇に手を合わせている姿と、カウンセリング室の窓に向かって手を叩いている姿とが重なり合った。墮した子の男女の区別はわからなかったが、麻利さんはその子に女の子の名前をつけていた。その子は彼女の永遠に失われてしまった分身だったのだろう。

麻利さんがカウンセリング室を利用したのは、だいぶ安定して、最後の心の整理をするためだったようだ。数回の面接は、彼女にとって、波乱に充ちた時代を清算し、将来に向かって自分を前向きに差し向けていく契機になったといえようか。しかし麻利さんが最後の仕上げのためにぼくを選んでくれたのだとしたら、それはどういうことだろうか。

カウンセリング室は「不思議な場所」という言葉を、ぼくは何度かクライアントから聞いた。それは日常の現実から切り離された空間で、日常生活の中では語れない話のできる場という意味だろう。もっというならば、それは、「運命」とか「魂」とかいったことを感じさせてくれる場という意味で、宗教的な空間。常識的なヒューマニズムをこえた大きな視野の中で、改めて地上の現実を生きていく人間として、自分自身を捉え直すことのできる場。そういったものを麻利さんはカウンセリング室に期待したのかもしれない（そうしたものを提供できるかどうかは、カウンセラーの専門性は掛かっていると、ぼくは思う）。カウンセリング室の窓に向かって、お祈りするよう拍手を打つ彼女の姿を思うと、そんなふうに思われてくる。

8

カウンセリング室に、一年の女子四人が来ていた。E子さんとF子さんは派手なガーリーな格好、G子さんとH子さんはきちんと校則にしたがった姿だった。E子さんの恋愛の相談になった。F子さんがわけしり顔で、率先していろいろと解説してくれた。こんな会話が展開された。

F子さん、「あいつはやりまくり。つきあったら、絶対やられるよ」。

G子さん、「妊娠したら、困る」。

E子さん、「ゴムつけてもらうから、いいもん。念のため、三枚つけてもらう」。

F子さん、「あいつ穴、あけておくよ」。

どうしてそんな悪さをするのか、ぼくには理解しがたいが、とにかく女子の嫌がることなら何でもやりたがる悪童のイメージである。次第に話にみんなの話に熱がはいってくる。

F子さん、「あいつ、今、溜まっているから、すぐやろうとするよ」。

G子さん、「えっ、溜まってると、ストレスが溜まっているってこと?」。

B子さん、「もーッ、G子はお子様なんだから」。

H子さん、「中絶したらいい。麻利ちゃんは中絶したって」(彼女は先に述べた麻利さんのことを知っていた)。

F子さんは両手を鉗子の形にして、「こんなので、胎児の頭、挟んで取り出すから、頭つぶれちゃうのよ」。

H子さん、「小さなうちに中絶したらいいかも。でも、最近、おなかでできたなあと思ったら、妊娠ってこともあるって」。

F子さん、「取り出そうとすると、ひょいと逃げるんだって」。

E子さんは、「えっ、そうなの」と、怖くなった様子でH子さんのほうに身を寄せる。

ぼくは彼女たちの気分に乗せられて、調子づいて、「医者に、取り出した子どもみせられるんだって、これがあなたの赤ちゃんですよって」と、そのとき心に閃いた空想を怪談囁ふうに述べた。彼女たちは本気にしたのか、「えーッ！」と声を揃えて驚嘆した。

妊娠や赤ん坊をモチーフにした怪談は、映画『ローズマリーの赤ちゃん』（一九六八年）をはじめ枚挙にいとまないが、特に少女マンガの世界では盛んである。これは、女の子たちにとって妊娠出産は、自らの将来に待ち受けているものであるからというだけではなく、彼女たちが通常、物（身体）としての自分により密着して生きており、その存在の神秘に触れているからではないか。身体存在の神秘は、前思春期の頃から、あるいはもっと早期から漠然と感じはじめ、第二次性徴期にはいついっそう強度を高めることであろう。妊娠や赤ん坊の怪談の無気味さは、女性の身体の聖性（西村，2004a）とつながっている。女の子たちはそうした怪談の無気味さに心を惹き付けられながら、自らの女性の身体をいたわる気持ちになり、ひいては身体や生命に対して畏敬の念を味わうのではないだろうか。

クリスティアン・オリヴィエ（大谷・柏訳，2003）によると、「女の子がセックスするのは、同年齢の男の子よりもはるかに感情的なコンテクストにおいてである。それはたんに、感情的なものが、このかつての『聞き分けのよい』小さな女の子が教えられたすべてのものだからである」（85頁）。女の子にとっては、自分に関していわれるのは感情的な言葉ばかりで、自分の身体に関する言葉が欠けていると、オリヴィエはいう（彼女はラカン派であるから、言葉を特に重要視する）。そういえば、よく女の子に対する評語として、「いい子」という言葉が使われるが、それは「やさしい子」「思いやりのある子」といった感情的な意味のこめられた語である。「やさしい子」とは母親の気持ちをよく察してくれ、母親を喜ばせてくれる「従順な子」という意味でもある。女性は生来、感情的な存在なのか、それとも社会のあり方が女性を感情的にしてきたのか、それはわからないが、とにかく通常、母が娘を評価する物差しの筆頭に来るのは感情である（一般化するの無理があるが）。メディアの提供する様々な物語でも、やはりそうである。

女の子にとって身体は、とても親密でありながら、それまで十分に言葉にされていなかったものである（だから怪談になる余地があると、ぼくは思う）。オリヴィエによると、だから、女の子は自分を「与えた」男の子から、その欠けている言葉を聞きたがるという。男の欲望の対象として、自分自身を見出すことで、女の子は、物としての自分の価値を実感することになる。その価値がどのようなものか、言葉でいってほしいと、当然女の子は思う。しかしまだ女性心理に疎い男の子には答えられない。彼は「女の子のうちにはセックスによっては満たされない何かがあることを漠然と理解する」（同頁）のみである。

こうしたすれ違いは、快樂原則に添って衝動的に生きている、行動化する男子との関係において、特に見られるものであろう。そんな男子は性行為に走るのにも抑えがきかない。ロマンティックな段階を素飛ばして、性急に即物的な欲求の解消に向かう彼らの行為は、単なる排泄行為に近い。そんな男子に対して女子は、なんとか感情的なコンテクストを作り出そうと努力する。男の子は男の子同士で、付き合った女のことを、あたかも釣った魚の自慢話のように語って喜ぶ（男子は、自慢話をしたり、相手を貶して笑い合うのが、楽しいものである）。一方、女の子は女の子同士で恋愛について熱心に語り合い、複雑微妙な気持ちを言語化し、自らの恋愛をロマンティックな物語に仕立て上げ、その物語の主役（主体）になろうとする。

女の子は、ある特定の男の子の欲望の対象となることで、はじめてかけがえのない自分の存在を実感することがある。これまでの自分の全存在が肯定されるような幸福感を得る。これまで母

親をはじめ他者に望まれたイメージに合わせて自分を構成してきて、ふと「本当の自分」とは何か疑問に思ってしまった子が、彼によってはじめて「本当の自分」になれたと思う。「本当の自分」とは、これまで漠然と感じてきた物としての自分も含めた何ものである。母親をはじめ、これまで誰も明瞭に感じさせてくれなかった、そうした「本当の自分」が、「今、ここ」に彼と共にいると思う。

そんな恋愛至上主義の子は、そうした思いをより実感するために、男の子の性の欲求に期待し、積極的に応じることになる。「融合」体験はたしかに「本当の自分」をより実感させてくれたような気がする。ただそこに、オリヴィエのいうように、たしかに彼の言葉が伴えば、もっとよいのではあるが、しかしそんな言葉がなくても、とりあえず彼女はしあわせである。しあわせに浸っていたい。自分の「居場所」（麻利さんもその言葉を用いた）が見つかったのであるから。

しかしながら、彼女の思惑はずれてくることがある。せっかく手に入れた、かけがえのない「居場所」を守るために、彼を繋ぎとめておくために、頑張らないといけなくなる。「本当の自分」が幻想であることに気づきはじめるが、それをはっきりわかってしまうことには耐えられない。幻想に浸っていたい。そうして現実検討力が鈍くなる。そんな中で麻利さんのように十代前半での妊娠中絶が起きることがあると思われる。

9

二年生になった宙太君は登校することは少なくなった。年長の反社会的な青年や大人との関わりもでき、窃盗、暴力行為などで警察の厄介になることも増えていった。

ある日、下校のときぼくが校門を出ると、宙太君が笑顔で声をかけてきた。ちょっと立ち話をした後、彼は「ぶるんぶるんぶるん」と、バイクのハンドルをもつ手をして、右手をぐいぐい廻してアクセルを効かせる真似をして、立ち去っていった。子どもっぽいなとぼくは思った。しばらくして、宙太君は、本物の改造バイクで、何人かでL中学の中庭にはいりこんできて、爆音をあげて学校のみんなを驚かせた（ぼくはカウンセリングの際中で、相談に来ていた生徒と窓から覗くと、宙太君のいくぶんこわばった顔が見えた）。教師がバラバラと駆けつけたときには、彼らはもう立ち去っていた。

またこんなことがあった。宙太君は校門にもたれて、地面に腰をおろしていた。その傍らにひとりの女子（派手なロリータっぽい装い）がいた。ぼくはいつものように気安く声をかけ、宙太君に「彼女？」と訊いた。しかしそのときの彼は不機嫌で、「行け！マジで」といった。その声は震えていた。緊迫したものが感じられた。宙太君の傍らの女子は、彼とは対照的に奇妙に落ち着いているように見えた。彼女はぼくの方を見上げ、にやりとよく意味のわからない笑い方をした。ぼくはその場を立ち去るしかなかった。間もなく何人かの教師がものものしい様子で、彼らのほうに向かうのがみえた。

後でM先生に聞いた話によれば、それは宙太君がある教師の顔を殴った直後だった。その教師は鼻血を出した。彼の側にいた女子のことを訊いてみると、彼女は「怠学」傾向でしばらく学校に来ていなかった子であり、宙太君が教師を殴った後、いつの間にか彼の側に来て、いっしょにいたとのこと。彼女は、宙太君が一線を越えてしまったとき、彼の混乱した自我を宥め、落ち着かせ、慰めるために、そこに女神としてあらわれたように、ぼくには思われた。彼女の妙な落ち着きや笑いは、なにか男子の荒れ狂う気持ちを静める女神の役割を、彼女自身が果たしているこ

との自覚と矜持をあらわすものではなかっただろうか。

三年になって、宙太君は二度カウンセリング室を訪ねてくれた（授業中であったが、M先生には許可をいただいた）。二度とも彼はぼくという人間と向き合って、しっかり話がしたいという様子だった。外で話をするときと違って、彼は自分の気持ちを素直に語った。彼の背丈はだいぶ伸びていて、ひょろりとしていた。

その頃、ぼくは菩提樹の実のプレスレット（数珠を改造して、ぼくが作ったもの）を右手首にはめていた。その頃、ぼくは生徒との関わりがより親密になったぶん、生徒によって未熟な怒りを触発させられることがときどきあった。その頃、生徒の気持ちがぼくの心に流れこんできて、カウンセラーとしては充実感があったが、一方で心がこわばってしまっている感じもあった。学校の負のエネルギーの渦、教師や生徒の自我の統制を離れた心の負のエネルギーの絡まりあい、それまで「外部者」であったぼくの心の奥の負の部分も反応して、いつしか巻き込まれてしまっていたのだと思う。そのことでぼくは、より教師や生徒の大変さを体感的に理解することができたといえるが、ぼくはこれではいけないと思い、負の力に負けてしまわない精神性を堅持する必要性を痛感し、その菩提樹の実のプレスレットをするようになったのである。

宙太君との一度目の面接のとき、彼はぼくのものに興味を示した。ぼくはそれを外して彼に見せてあげた。彼はそれを自分の手首にはめて、しばらく眺めてから、ぼくに返した。このとき少なくともぼくの方では、宙太君に対して、同じく負の力に翻弄されて「キレ」てしまう弱い者同士という共感があった（以前宙太君がぼくのことを「おまえみたいなのはキレると怖い」といっていたことを思い出す）。

二度目の面接のとき、宙太君は「あのピアスの話、おぼえているか」といった。彼の一年生の冬、保健室で上機嫌で語ってくれた空想の話で、ぼくの記憶に印象深く刻まれていることだったので、ぼくは「うん、憶えているよ」といった。「あのピアスの話」ともう一度宙太君は言って、自らの耳たぶに指を当て、腰を捻って、ピアスをつけるときの仕草をして見せた。その仕草は女性的なものにぼくには感じられた。宙太君は「あれ、おもしろかったなあ。おまえ、本気にしとるんだからなあ」としみじみといった。それから宙太君はおもむろに立ち上がると、そこにあった生徒用の机を前にして、「これから審判をはじめます」と、ひとりで「審判ごっこ」遊びをはじめた。家庭裁判所の審判は、反社会的行為を繰り返す彼のような子には、無関心ではいられないことなのだろうぐらいにしか、そのときのぼくは思っていなかった。

後からM先生に聞いた話では、その二度目の面接の翌日は、彼自身の現実の審判の日であった。彼の両親は彼の面倒はもう見切れないと訴えており、その審判で宙太君は、遠方の少年院に収容されることが決定した。ぼくは宙太君の「審判ごっこ」の真剣さを思い返した。彼は、自らの人生を決定づける審判を明日に控え、たぶん不安な気持ちでいたとき、ぼくのことを思い出してくれた。「きっと不安だったから、カウンセリング室に行ったんでしょね」と、M先生もしみじみいっていた。

現実はまだことに厳しい。どうしてこんなことになってしまったのか、宙太君自身にもよくわからなかったのではないか。とにかく大人たちによって最良の道が、彼のために用意された。抗えない力によって、その道に差し向けられるだろうことをおそらく知っていた彼は、旅立ちに当たって、二年近く前、子どもっぽい空想を語っていたしあわせな自分があったことを確認しておく必要があって、カウンセリング室のぼくを訪ねてくれたのではないだろうか。

註

「非社会的」とか「反社会的」という名称は、教育界で一般的に用いられているが、それらは「社会」（「学校社会」）を基準にして、生徒を評定する見方であり、教育的ではあっても、心理学的とはいえない。一方「行動化する」とは、内面に抱えておくべきこと（怒りや欲望）を、不適切な仕方（本人や他人を闇雲に傷つけてしまうような仕方）で行動に移してしまうという意味であり、こちらの方が心理学的な名称といえる。

以上の事例の記述には、著者の臨床体験から見出された心理的事実を歪めない程度に、相当の改変が加えられており、L中学も実在の中学とは一切関係がありません。

文献

河合隼雄、『子どもと学校』、岩波書店、1992。

西村則昭、「二人の別室登校の女子中学生」、心理臨床学研究、第18巻第3号、254-265、2000。

西村則昭、「少女漫画『天使禁猟区』と思春期女子の心理臨床」、心理臨床学研究、第22巻第2号、105-116、2004a。

西村則昭、『アニメと思春期のころ』、創元社、2004b。

西村則昭、「ガーリー・ルックとアルテミス元型」、心理臨床学研究、第23巻第2号、149-160、2005。

オリヴィエ、クリスティアン。大谷尚文・柏昌明訳、『母と娘の精神分析 イブの娘たち』、法政大学出版、2003。